

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320014

研究課題名(和文) ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群における密教思想の位置づけに関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Studies in the Position of mantranaya in the Works of the Monk-scholars of the Vikramasila Monastery

研究代表者

久間 泰賢 (Kyuma, Taiken)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：60324498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円、(間接経費) 3,870,000円

研究成果の概要(和文)：本科研の成果は、以下の3点に集約される。(1) ヴィクラマシーラ寺院との関連を有するインド仏教文献についてのデータベースを作成した。(2) 同寺院の代表的な学僧の著作群における密教思想の位置づけについて、各研究メンバーが検討作業を行った。(3) 上記の2つの作業を踏まえたうえで、密教思想とそれ以外の仏教思想との関係性の理解に関して何らかの学統が同寺院に存在するかどうかも考察した。このうち(2)と(3)の成果については、東京大学東洋文化研究所の学術雑誌『東洋文化』特集号(96号)で発表を予定している。

研究成果の概要(英文)：The results of this research can be summarized as follows: (1) A database was made for important texts preserved or known at the Vikramasila Monastery. (2) Each of the research members worked on the relationship between mantranaya and paramitanaya explained in the works of the monk-scholars of the Monastery. (3) Based on (1) and (2), we also discussed the existence of a community of thought regarding the relationship between mantranaya and paramitanaya. As for the outcomes of (2) and (3), we are now preparing to publish them in a special volume of the Oriental Culture (Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、中国哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：後期インド仏教 ヴィクラマシーラ寺院 密教 顕教

1. 研究開始当初の背景

インド密教の儀礼・実践体系が整備され、その体系に対する明確な思想的基盤が与えられるのは、7世紀前後のことである。それ以降の後期インド仏教では、僧院化の傾向と相まって、密教思想とそれ以外の仏教思想（小乗仏教、中観・唯識思想など、後に空海によって「顕教」と総称されるもの）が、学僧たちによって兼学されるようになる。その意味においても、後期インド仏教の思想体系が、密教思想とそれ以外の仏教思想の総合として成立していることは明らかである。それにもかかわらず、密教的側面とそれ以外の側面とは、従来の仏教研究では、国内外を問わず別個の研究対象として独立して扱われる傾向があった。こうした研究状況が存在してきた原因としては、密教思想の持つ難解さがそれに対する専門的研究を必要とし、その結果として専門家以外の関与を阻んできたという事情を挙げることができる。しかし、後期インド仏教において、密教思想とそれ以外の仏教思想との両者がいかに位置づけられ、価値づけられているかという点を明確にすることは、インド仏教史を精確に記述しようとする者にとって不可欠な営みであろう。

以上の問題意識に基づいて、これまで申請者は、チベットの伝承により *Vikramaśīla* 寺院（※800年頃建立とされる；複数の写本資料を基に海外研究協力者とも協議した結果、*Vikramaśīlā* ではなく *Vikramaśīla* を正式名称として採用）の学僧 *Jñānaśrīmitra* (980-1030年頃) に帰せられる『金剛乗に関する二つの極端な見解の排除 (*rDo rje theg pa'i mtha' gn̄is sel ba*, **Vajrayānāntadvayanirākaraṇa*)』の校訂テキスト・英訳註の作成を、密教研究者との共同研究で進めてきた。この著作はチベット語版本5種のみが現存しており、先行研究はほぼ皆無であったが、「密教思想がブッダの教説から逸脱しないこと」を経典・論理に基づいて証明する一方で、「密教思想が他の仏教思想（特に中観思想）よりも優れていること」を「11種の方便善巧 (*upāyakaśālyā*)」という概念を用いて細説するなど、申請者の問題意識に多くの示唆をもたらしてくれる、優れたモデルケースであった（同著作の *critical edition* と英訳註は *Serie Orientale Roma* より出版予定）。

今回の研究は、このモデルケースの成果を立脚点としつつ、関連分野の第一線で活躍する国内外の研究者の協力を新たに得て、申請者のこれまでの問題意識を「*Vikramaśīla* 寺院の（10世紀以降に現れる代表的な）学僧の著作群」という包括的な枠組みのもとで、総合的・多角的に展開しようとするものである。この枠組みを用いる根拠・意義は、以下の3

点に集約される。

(1) そもそも同寺院は、現存する資料から判断しても、後期インド仏教（または後期インド密教）を象徴する最大の拠点のひとつであり、同分野の研究において看過できぬ存在である。

(2) その同寺院の代表的な学僧による「密教思想の位置づけ」を検討することは、それ自体で重要な成果となる。しかしそれだけではなく、個別的検討の成果を互いに突き合わせて総合的・多角的に考察するならば、同寺院における「思想的な共通認識」や「特に重視された文献の傾向」など、いわば「学統」とも呼ぶべきものが、そこに浮かび上がってくる可能性がある。

(3) 同寺院の学僧たちがチベット仏教に大きな影響を与えたことは、周知の事実である。したがって、個々の学僧による「密教思想の位置づけ」の分析、並びに「密教思想の位置づけ」をめぐる同寺院の「学統」についての検討は、チベット仏教との関連においても重要な意義を有する。

2. 研究の目的

以上の学術的背景を前提として、本研究が目的とするのは、後期インド仏教における密教思想が、それ以外の仏教思想との関連においてどのように位置づけられていたかという問題を、特に10世紀以降の *Vikramaśīla* 寺院の学僧の著作群に焦点を絞って、総合的・多角的に考察することである。研究期間内に達成すべき具体的な目標としては、以下の3点を設定する。

(1) 基礎作業として、当時 *Vikramaśīla* 寺院において存在していた、もしくは周知されていた密教文献・それ以外の仏教文献について調査し、そのデータベースを作成する。

(2) それと平行・連携するかたちで、同寺院の代表的学僧の著作における「密教思想の位置づけ」について、研究メンバーが、これまでの各自の研究を踏まえた個別課題を設定して検討する。

(3) 「密教思想の位置づけ」をめぐる *Vikramaśīla* 寺院の「学統」について、(1)と(2)の成果を踏まえつつ、総合的・多角的に考察する。

3. 研究の方法

研究目的に記した3点の具体的な目標について、それぞれ次のような方法で達成を図る。

(1) 本研究の基礎作業として、海外の諸学

術機関との連携協力により、サンスクリット写本のコロフォン・チベット語翻訳文献コロフォンなどを資料としつつ、Vikramaśīla 寺院における密教文献・それ以外の仏教文献についてデータベースを作成する。

(2) それと平行・連携するかたちで、同寺院の代表的な学僧の著作に見られる「密教思想の位置づけ」について、各研究者が個別課題を立てて検討する。また、その成果は国内研究会・国際学会パネルにおいて随時報告し、研究計画へのフィードバックを行う。

(3) 「密教思想の位置づけ」をめぐる同寺院の「学統」について、(1) と (2) の成果を基に、海外研究協力者ともメーリングリストで意見交換しつつ、最終年度の国内研究会で総合的・多角的に考察する。

4. 研究成果

(1) 研究活動・成果における四つの側面

上述の研究目的・研究方法に基づき、科研費交付期間内に研究メンバーが推進した研究活動およびその成果は、概して以下の四つの側面から捉えることができる。このうち①は研究方法の(1)に、②～④は研究方法の(2)と(3)に対応するものである。

①データベースの作成：各研究メンバーが、同寺院の学僧の著作における引用文献と、同寺院に関連する言及を含む写本コロフォンについて、データベースの作成を進めた。入力フォーマットについては、研究分担者の苦米地が中心となって設計を行った。このデータベースは、同寺院で使用されていた仏教文献の実態を知るための重要な資料となるものである。平成 25 年度末にいったん成果を集約し(取りまとめは苦米地が担当)、今後はハンブルク大学のデータベースプロジェクト(Indo-Tibetan Lexical Resource、略称 ITLR)と連携しつつ、データベース公開を進める予定である。

②研究者間の交流促進：国内研究会(年 2～3 回)と workshop(平成 24 年度)を開催し、海外からも研究者を招聘して、密教研究者とそれ以外の仏教思想研究者の交流を促進した。また、一般財団法人人文情報学研究所の協力を得て英文メーリングリストを立ち上げ、研究者間の連絡を密にした。

③国外への成果発信：研究メンバーは、海外の学会や workshop に積極的に参加し、成果を発信するとともに、国際的協力関係を築くよう努めた。その結果、当該科研の組織は、海外の研究機関(特にナポリ東洋大学、ハンブルク大学)と交流を行う研究拠点として機能したと言える。

④写本研究の推進：上述の②と③を通じて、海外研究協力者とともに、Vikramaśīla 寺院の学僧の著作群(Ratnākaraśānti の *Sarvarahasyanibandha*—ナポリ東洋大学の Francesco Sferra 教授が校訂中—、Ratnākaraśānti の *Prajñāpāramitopadeśa*、Abhayākara Gupta の *Madhyamakamañjarī*—中国蔵学研究中心の Luo Hong 氏が校訂中—、Ratnarakṣita の *Padminī*—研究分担者の加納・倉西・種村が校訂中—など)のサンスクリット写本研究を進めた。いずれの文献も、後期インド仏教史の再構築に関わる、極めて貴重な未公開資料である。

なお、研究方法の(2)と(3)に対応する成果については、東京大学東洋文化研究所の学術雑誌『東洋文化 (*Oriental Culture*)』の特集号(96号)として公刊予定である。

(2) 個別的な研究成果

次に、研究代表者・研究分担者による個別的な研究成果の概要について、以下に順を追って記述する。これは、主として研究方法の(2)と(3)に対応するものである。

①久間(研究代表者)：Vikramaśīla 寺院の著名な学僧 Jñānaśrīmitra に帰せられる密教文献『金剛乗に関する二つの極端な見解の排除』の内容を検討するとともに、チベット仏教の思想家プトゥン(Bu ston)が同文献をどのように解釈したか、またインド仏教における密教思想の位置づけをプトゥンがどのように捉えているかを考察した。その他、研究会などの全体的な取りまとめを行うと同時に、本科研と ITLR との連携方法の検討を進めた。

②加納(研究分担者)：写本関係の仕事としては、チベット伝存写本とカトマンドゥ伝存写本の流通経路を解明する作業に従事した。また、Ratnākaraśānti 著 *Sarvarahasyanibandha* の写本の訳注を作成し、Abhayākara Gupta の *Munimatālaṃkāra* の写本校訂の一部を刊行した。思想関係では、タントラ注釈文献に現れる Ratnākaraśānti と Abhayākara Gupta の如来蔵理解が、それぞれ唯識学説と中観学説とを背景とする点で異なっていることを明らかにしたうえで、前者の如来蔵理解の類型を解明した。また、『宝性論』をめぐる Vikramaśīla 寺院の諸学僧の見解をまとめた論文を提出した。さらには、いわゆる「六賢門」についての最初期の記述が、Vikramaśīla 寺院ではなく Buddhagayā の金剛法座に関わっているという点も明らかにした。

③倉西(研究分担者)：加納・種村と共同で、Ratnarakṣita の *Padminī* 第 13 章前半部の校訂テキストを作成した。また、同文献の第 1 章の校訂・読解も加納・種村と共同で進めた。さらに、Śrīdhara の著作 *Sahajālokaṇḍikā* の

校訂・英訳を進めた。

④桜井（研究分担者）：Vāgīśvarakīrti 著『七支』第1章のチベット語訳校訂テキストの整定と読解を進めるとともに、Atiśa と Jitāri の『阿闍成就法』の校訂・翻訳も行った。また、「Atiśa 流阿闍」に関する文献資料を収集し、インドからチベットへの伝承状況を調査した。さらに、この成果も内容に含めたものとして、チベット密教の死者儀礼の一端を明らかにする論文を公表した。

⑤種村（研究分担者）：maṅḍala の語義解釈に関する思想的系譜の解明を行うとともに、『Padminī』第22章前半部に見られる「経典の分量」をめぐる議論について検討した。また、Abhayākaragupta の実践論における伝統的大乗仏教と密教の関係を探った。その際、従来の研究の総括と今後の展開のために、Abhayākaragupta と Ratnarakṣita 両者の実践論の類似・相違も検討し、Abhayākaragupta の実践論のインド密教における位置づけを図った。

⑥苫米地（研究分担者）：Bhavyakīrti による浩瀚な著作『灯作明 (Pradīpoddyotana) 再註』の内容を検討し、インド後期密教の瞑想実践と仏教認識論の関わりを調査した。その他、データベースの取りまとめを担当しつつ、本科研と ITLR との連携に向けて調整を行った。

⑦宮崎（研究分担者）：11世紀にチベットにも伝わった Atiśa の大乘仏教思想を検討し、その成果を出版した。また、今後さらに大きな視点から密教の位置づけを検討する可能性を探りつつ、Atiśa が *Nayatrāyapradīpa* を典拠として密教を最上位に位置づけているという従来の研究成果を再確認した。その他、チベットの歴史書に現れる Vikramaśīla 寺院の記述のデータベース化も推進し、本科研と ITLR との連携の端緒を開いた。

⑧望月（研究分担者）：Atiśa の密教文献のうち、『秘密集会タントラ』関係の文献と Tāra 成就法に関する文献を取り上げ、そこに受容されるタントラ文献を調査した。また、Atiśa の著作のコロフォンと歴史資料などを用いて、彼のインド滞在に関する情報を収集し、Vikramaśīla 寺院における彼の活動について考察した。さらには、Atiśa に帰せられる密教文献のうち、『根本過犯』に対する注釈書の調査を行い、彼の伝承する密教文献の一側面を明らかにした。

(3) 研究成果についての総合的な所見

以下は、研究成果についての総合的な所見・自己評価である。まず、研究方法の(1)に関して、ハンブルク大学のデータベースプロジェクトである ITLR との連携の道筋を開くことができた点は、今後の国内外の学術的交流につながる成果として評価してよいと

思われる。その一方で、今後機会があれば、データベースの分量をさらに増やしていくことに努めたいとも考えている。

次に、研究方法の(2)については、研究メンバーの協力も得て、多くの顕著な研究業績が得られたと確信している。これらの成果は、すでに述べたとおり、現在編集作業を進めている『東洋文化 (*Oriental Culture*)』特集号(96号)において公表を行う。

研究方法の(3)、すなわち「何らかの思想的な共通認識」や「特定の文献重視の傾向」の有無の問題についても、同じく『東洋文化』特集号において、研究代表者が本科研の成果を踏まえた総括的な所見を公表する予定である。非常に大きな問題ではあるが、今後のさらなる研究の足がかりとなるような仮説を提示したいと考えている。

その他、本科研の重要な成果として繰り返し強調しておきたいのは、当初の目的のひとつでもあった「国内外の密教研究者とそれ以外の仏教思想の研究者との間の学術的交流」が、極めて高い程度で達成できたことである。科研ワークショップや研究会の開催、関連学会への積極的な出席を通じて、活発な学術交流が行われた結果、研究者間のネットワークが緊密なものになった。その際、本科研のために立ち上げた英文メーリングリストも、大きな役割を果たしたとすることができる。本科研をひとつのきっかけとして、国内外の密教研究、ひいては仏教研究が今後さらに進展してゆくことを祈りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計37件)

- ① 加納和雄、ラトナーカラシャーンティの諸著作における如来蔵理解の二類型、『密教文化』、査読有、225号、2013、7-35
- ② 倉西憲一、インド仏教終焉期における大乘仏典受容の一例—顕密両修の学僧ラトナラクシタの著作を中心として—、『総合仏教研究所年報』、査読有、35号、2013、209-224
- ③ Kaie MOCHIZUKI、References to Indian Buddhist Masters in the commentary on the *Sūtrasamuccaya* by Ratnākaraśānti、『印度學佛教學研究』、査読有、60-3号、2013、131-138
- ④ 加納和雄、インド後期密教における如来蔵への言及とその解釈—タントラ注釈書を中心として—、『密教研究』、査読無、44号、2012、125-137
- ⑤ 苫米地等流、法天訳『最上大乘金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流、

- 『印度學佛教學研究』、査読有、61-1号、2012、401-406
- ⑥ Ken'ichi KURANISHI、Note on the Classification of Buddhist Tantras—The View of Jinadatta and Śrīdhara—、『豊山教学大会紀要』、査読有、39号、2011、1-11
- ⑦ 種村隆元、チベット語訳『大日経』第2章に関するノート(1)、『現代密教』、査読無、22号、2011、73-84
- ⑧ 宮崎泉、インド大乘仏教における解脱の思想と慈悲、『日本の哲学』、査読無、12号、2011、39-53
- ⑨ 望月海慧、Dīpaṅkaraśrījñāna に帰される秘密集会タントラ関連の文献について(2)、*Acta Tibetica et Buddhica*、査読有、5号、2011、91-150
- ⑩ 久間泰賢、Jñānaśrīmitra に帰せられる著作『不一不異の考察 (*Bhedābhedaparīkṣā*)』について (2)、『論集 (三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室)』、査読無、14号、2010、88-112

[学会発表] (計 24 件)

- ① 種村隆元、密教興隆の要因に関する一考察、第 58 回国際東方学者会議シンポジウム「インド古代・中世における思潮変革のモメンタム」(招待講演)、2013 年 5 月 24 日、日本教育会館(東京都千代田区)
- ② Ryugen TANEMURA、Tantric Practice Taught by Abhayākaragupta、The Vikramaśīla Workshop (科研ワークショップ)、2012 年 9 月 16 日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)
- ③ Ken'ichi KURANISHI、Quotations in Ratnarakṣita's Padminī — A Study on Scholarly Activities in the Last Period of the Vikramaśīla Monastery —、The Vikramaśīla Workshop (科研ワークショップ)、2012 年 09 月 15 日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)
- ④ Taiken KYUMA、Bu ston on pāramitānaya and mantranaya、The 16th Congress of the International Association of Buddhist Studies、2011 年 6 月 25 日、Dharma Drum Buddhist College (Jinshan、Taiwan)
- ⑤ Toru TOMABECHI、Bhavyakīrti's sub-commentary on the *Pradīpoddyotana* as a doxography — Some preliminary remarks、The 16th Congress of the International Association of Buddhist Studies、2011 年 6 月 25 日、Dharma Drum Buddhist College (Jinshan、Taiwan)
- ⑥ Kaie MOCHIZUKI、On the *Guhyasamāja* Literature attributed to Dīpaṅkaraśrījñāna、The 16th Congress of the International Association of Buddhist Studies、2011 年 6

月 25 日、Dharma Drum Buddhist College (Jinshan、Taiwan)

- ⑦ Kazuo KANO、Materials under preparation for Manuscripta Buddhica series—Eleventh century Yogācāra Works by Sajjana and Vairocanarakṣita —、The Manuscripta Buddhica Workshop in Naples、2011 年 5 月 5 日、Procida (Naples、Italy)
- ⑧ Ken'ichi KURANISHI、The manuscript of the *Sahajālokapañjikā*、The Manuscripta Buddhica Workshop in Naples、2011 年 5 月 5 日、Procida (Naples、Italy)
- ⑨ 宮崎泉、インドとチベットの交点—アティシヤの伝えた仏教—、羽田記念館定例講演会(招待講演)、2010 年 12 月 4 日、ユーラシア文化研究センター(京都市北区)
- ⑩ Taiken KYUMA、Outline of the Vikramaśīla Project and Some Remarks on the Classification of Tantric Scriptures、The Third International Workshop on Early Tantra、2010 年 7 月 16 日、University of Hamburg (Hamburg、Germany)

[図書] (計 13 件)

- ① 加納和雄、『大乘莊嚴經論』第 17 章の和訳と注解—供養、師事、無量とくに悲無量—(自照社出版)、2013、386 (216-226、227-257)
- ② 倉西憲一、『初期密教 思想・信仰・文化』(春秋社)、2013、373 (98-106、148-157、158-165)
- ③ 種村隆元、『シリーズ大乘仏教 10 大乘仏教のアジア』(春秋社)、2013、311 (73-102)
- ④ 久間泰賢、『シリーズ大乘仏教 7 唯識と瑜伽行』(春秋社)、2012、290 (221-253)
- ⑤ 宮崎泉、『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』(春秋社)、2012、226 (137-167)
- ⑥ 倉西憲一、『聖地と聖人の東西—起源はいかに語られるか—』(勉誠出版)、2011、520 (183-202)
- ⑦ 種村隆元、『新アジア仏教史 02 インド II 仏教の形成と展開』(佼成出版社)、2010、464 (209-262)

[その他]

ホームページ等：加納和雄氏(研究分担者)の業績一覧

<https://koyasan-u.academia.edu/KazuoKano>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久間 泰賢 (KYUMA, Taiken)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：60324498

(2) 研究分担者

加納 和雄 (KANO, Kazuo)
高野山大学・文学部・准教授
研究者番号：00509523

倉西 憲一 (KURANISHI, Ken'ichi)
大正大学・総合仏教研究所・研究員
研究者番号：90573709

桜井 宗信 (SAKURAI, Munenobu)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：30292171

種村 隆元 (TANEMURA, Ryugen)
大正大学・総合仏教研究所・研究員
研究者番号：90401158

苔米地 等流 (TOMABECHI, Toru)
一般財団法人人文情報学研究所・仏典写本
研究部門・主席研究員
研究者番号：60601860

宮崎 泉 (MIYAZAKI, Izumi)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：40314166

望月 海慧 (MOCHIZUKI, Kaie)
身延山大学・仏教学部・教授
研究者番号：70319094

(3) 連携研究者

なし

(4) 海外研究協力者

Orna ALMOGI (Hamburg 大学)
BANG Junglan (Hamburg 大学)
Martin DELHEY (Hamburg 大学)
Harunaga ISAACSON (Hamburg 大学)
Mei ISAACSON (Göttingen 大学)
LUO Hong (China Tibetology Research
Center)
Alexis SANDERSON (Oxford 大学)
Francesco SFERRA (Napoli 東洋大学)
Péter-Dániel SZÁNTÓ (Oxford 大学)
Dorji WANGCHUK (Hamburg 大学)